FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2016.9.23 No.54

平成28年度 特別展

城下町福井の町と人

江戸時代は「城下町の時代」とも呼ばれます。全国の諸大名はそれぞれの領地と領民を支配する拠点として城郭や陣屋を構え、城下町をつくりあげました。日本で最大の城下町といえば江戸ですが、ここ福井にも福井藩・越前松平家の城下町が築かれ、地方の大藩が有する大規模城下町として発展しました。

本展では、この城下町福井を取り上げます。城下町成立以前のようすにも触れつつ、柴田勝家による北庄城建設以来、越前の政治・経済の拠点となった都市の歴史を紹介します。また、福井城跡の発掘調査成果をふまえながら、武家地・町人地など、城下町に生きた人びとにスポットを当ててみたいと思います。ここでは、その概要を紹介します。

一、考古学から見た福井城のなりたち

現在の福井市街地にひとが住み始めたのは縄文時代からと考えられ、弥生から古墳時代にかけて遺構・遺物が増加し、集落が形成されたとみられます。しかし、奈良・平安時代初期頃の層から、官衙（かんが）風の大形建物遺構、緑釉（りょくゆう）や灰釉（かいゆう）をかけた陶器や墨書土器などの遺物がみつかっています。これらは一般的な集落とは一線を画しており、この時代に「マチ」の原点ができあがったことがわかりました。

平安時代創建とされ、現在も市街の中心に鎮座する神明神社が、周囲に門前町の賑わいをもたらしたとされ、さらに戦国時代にはこの賑わいを支配下に収めるべく、朝倉氏が一族の朝倉土佐守を置きました。実は、朝倉氏時代の整備がのちの北庄城、さらには福井城の街区の原形となっていることがわかってきました。ここでは北庄城・福井城へと至る前史を、近年の考古学的成果から紹介します。

二、城下町の時代

城下町は戦国大名の登場とその所領支配のもとで出現し、16世紀末から17世紀初頭に武士の統一政権が成立したことによって全国的規模でいっせいに建設されていきました。

天正３年（1575）９月、織田信長から越前の支配を任された柴田勝家によって、北庄城が建設されました。

慶長　越前国絵図（部分）　松平文庫　福井県立図書館保管

のちに勝家を滅ぼした羽柴（豊臣）秀吉は、「城中に石蔵を高く築き、天守は九重だった」と語っており、北庄城の壮大さをうかがうことができます。武家地は神明神社の境内までを割いて設けられ、町人地は城郭西側の北陸道沿いに整備され、城下町全体は堀と土居の惣構で囲まれていました。

慶長６年（1601）８月、越前に入国した福井藩の初代藩主結城秀康は、北庄城（福井城）の築城工事に着手しました。百間堀をはじめとする内堀・外堀がつくられ、城郭内に武家地の大部分を配置しました。また町人地は城郭北側へ大きく拡張され、足羽川の南北にまたがる城下町福井の形が姿を現しました。

三、町人地の社会と文化

城下町の商工業機能を担う商人・職人たちが居住する町人地は、町（ちょう）と呼ばれる共同体が基礎組織になっていました。福井では江戸時代中期の町数は計126町で、これらは11の町組にまとまって運営されていました。町人地の戸数は約5400軒、人口は約２万人を数え、武士を含めると約３万2000人と推定されています。町の住民は基本的には屋敷を所有する町人ですが、借家や地名子（じなご）（地借）も住んでいました。ほかに寺院の境内・門前にも地名子がいました。

町人地は結城秀康の城下町建設以来、地子（屋敷に課される税の一種）免除でしたが、その代わりに町役などの夫役が課されました。例えば、大雪の際には藩の施設などの除雪や屋根の雪降ろしを行うため、連日多くの雪掻き人足が徴発されました。一部の特権町人はこうした町役も免除されていました。

越前国北之庄御城下古図　当館蔵

福井で正月に行われた祭り「馬威（うまおどし）」では、城下町のメインストリートである本町通りを舞台に、祭りを見物しようと群集する人びとで賑わいました。

四、武家屋敷の生活

城郭内に集住する家臣団の屋敷地が武家地です。ここでは、江戸時代前期における３つの武家屋敷を取り上げて紹介します。

①下馬御門内　城代屋敷

本丸の南、下馬御門内の東側に城代屋敷と呼ばれる屋敷がありました（現在の福井駅前大通り付近）。ここは家老次席にあたる城代または御留守居（城代補佐役）の役宅がありました。平成14年（2002）の発掘調査では、上級家臣の屋敷にふさわしい陶磁器などが多く出土したことが特徴です。

②大名小路　狛（こま）（南狛）屋敷

狛家は、家老を輩出する高知（こうち）席の有力家臣です。同じ高知席の広大な屋敷が立ち並ぶ大名小路に、狛屋敷もありました（現在の福井鉄道市役所前駅付近）。知行１万石を与えられていた狛家は、配下の与力・家来とその家族が数百人にも及び、家来の場合は狛屋敷内の長屋に居住していたと考えられます。

③永平寺町　石川屋敷

石川家は知行1500石で、三河国出身の由緒ある家臣でした。屋敷は城郭内東部の武家地、永平寺町の一角にありました（現在のえちぜん鉄道新福井駅付近）。平成８年（1996）からの発掘調査で、年貢の荷付け札と思われる木簡が多く出土し、福井藩の知行制を物語る重要な資料となっています。

（河村健史・久角健二）

馬威図屏風（部分）　当館蔵

特別展　城下町福井の町と人

平成28年10月21日（金）～11月23日（水・祝）

＜観覧料＞　一般 400円　大学・高校生 300円　小中学生・70 歳以上の方 200円

※20名以上の団体は２割引

資料紹介

聖観音菩薩立像

大土呂町天満神社所蔵

［法　量］

像高	89.2	髪際高	76.3		
面長	9.4	面幅	8.5	面奥	12.2
頂～顎	21.7	耳張	10.6		
		肩張	22.4	胸奥	8.7
		肘張	15.8	腹奥	11.6
		裳裾張	17.0	裳裾奥	10.3（cm）

浄土真宗の強い越前では「古い仏像は残っていない」といわれていました。ところが意外にも古い仏像は神社に伝えられてきました。今回紹介するお像も社殿の奥深く祀られ、集落の方でさえなかなか拝することのなかった神社の古い仏像（御神体）です。

1　聖観音菩薩立像の概要

お像は像高89.2㎝。高い髻を結い、目を伏せています。上半身には条帛を着け天衣を両肩から垂らし、下半身は裳と腰布で覆う「菩薩」のすがたです。右手は手を上向きに開き、左手には蓮華の蕾を持っています。腰を少し左に振り、立っています。

構造は一木割矧ぎ作りで、内刳りを施します。仕上げは後補の古色（墨等で全体を黒塗りにする）仕上げで、目・唇のみ描かれています。

下膨れで静かな表情、奥行きを誇張しない穏やかな体躯。大きく垂らした裳折り返し部の薄絹を表現したような浅く流れるような衣紋等から平安後期に作られたと考えられます。

2　像の特色

おっとりした優しい表情や誇張はないが張りのある肉付き体躯は、平安後期の優雅な雰囲気をよく残しており、見どころといえるでしょう。しかし、よくみるとかなり後世の修理により像容が変化しています。まず、頭頂の高髻は鎌倉時代風に別材で作られた新しいものです。接地する裳裾先が不自然に断たれており、本来もっと足が長かったとみられます。膝前の衣紋も正面裳折り返し部の流麗な衣紋に対し、非常にたどたどしく素人的な仕上げです。裳・腰布部分は布の質・量感のない単純なものであることから、オリジナルの彫刻面の状態が悪いため、改めて衣紋を彫り直したと考えられます。また、両肩より手先まで後補であることから、元々どのような印相であったかは不明であり、本来の尊名は聖観音菩薩ではなかった可能性もあります。

以上のような後補の状態から下半身が激しく傷み、特に足元は自立できないほどに朽損が進んでおり、切断・取り換えをしなくてはいけないほどであったことがわかります。しかしある時（江戸時代後期頃か）大修理をおこない、よみがえったのが現在見るお姿といえます。修理には集落の負担も大きかったと思われますが、大切なお像として集落を挙げて修理事業を遂行したのでしょう。

3　なぜ仏像が神社に？

ところでこのお像は、ほとけでしょうか？かみでしょうか？そのヒントは、この仏像の脇侍仏である不動明王・毘沙門天にあると思います。両像とも本像に比べ新しい像ながら比叡山横川中堂からはじまった三尊構成であることから、本像は、神像と同義の「本地仏」ではなく、「ほとけ」として仏堂に祀られていた正真正銘の仏教尊像と考えられます。ところが明治の神仏分離により、集落が管理する仏堂を名称のみ神社に改めた、あるいは神社内にあった神宮寺のような仏堂が廃された際、尊像のみ合祀された等の事情から、社殿内に「御神体」として祀られたと考えられます。詳細な経緯は集落に関わる文献等の研究を待ちたいと思います。

以上のように平安時代にさかのぼる古いお像として貴重であるのみならず、大土呂集落を長い間見守ってきた地域の歴史を伝える証人としての意義も重要です。今後も集落の拠り所として未来へ伝えられることでしょう。

（河村健史）

※本像は特別公開「村を見守る社とお堂」で公開しました。

聖観音菩薩立像

館蔵資料紹介

新年繁昌雙六

福井民報1月1日号付録　福井民報発行

［法　量］ 縦 54.5×横 79.5（cm）
［発　行］ 昭和9年（1934）1月1日

お正月の広告として企画されたすごろくです。右下の振り出しから、中央の上り（だるま屋）を目指すものです。枠外の記載から、福井民報の昭和9年（1934）1月1日号の付録であったことがわかります。なお、いまのところ、「福井民報」についての詳細は不明です。

このすごろくには、福井市街地の商店や医院など34件の広告が掲載されています。職種が明らかな33件の内訳を見てみると、料理店、喫茶店といった外食産業が8件ともっとも多く、ついで、服飾関係（洋品店・呉服店・貴金属・履物）が7件を数えます。ほかには食料品の製造または販売店が4件（米穀・菓子・牛乳・醸造が各1）、医院が2件掲載されています。残る12件は、電気関係、クリーニング、漆器、タクシー、書店、写真館、株（証券?）、美容院、薬局、印刷所、ラジオが1件ずつの掲載で、業種が多様です。業種が被らないように配慮された可能性も考えられます。

また、全体のうち29件は所在した地区（大名町、駅前、西別院前など）がわかります。それらの分布をみてみると、29件中25件が足羽川から北に位置しています。そのうち24件は福井駅西側、「福井駅前」として親しまれてきた地域に分布し、駅から西に向かう現在の駅前電車通り沿いに13件が集中します。

これは、当時の「福井駅前」の状況を示すものと考えられます。掲載商店が集中している付近は、とくに昭和初期に商業地として栄えました。そのきっかけとなったのが、昭和3年（1928）に開業した百貨店「だるま屋」です。同6年には遊技場「コドモの国」も新設され、専属の「だるま屋少女歌劇団」が興行を開始します。買い物とレジャーという魅力を兼ね備えたことで、「だるま屋」とその周辺地域は駅前の賑わいの中心地になっていきました。

さらに、このすごろくが発行される前年、昭和8年には福井平野で陸軍大演習が行われています。演習とそれにともなう行幸への対応で、駅前広場や道路、橋などの整備が進められました。さらに、それまで足羽川南岸を終着駅としていた福井鉄道の福井・武生線の路面電車も幸橋（昭和5年にコンクリート化）を渡り、だるま屋前を通って福井駅前まで乗り入れました。つまり、昭和9年の正月は、だるま屋とその近隣の商店にとって、より広い地域の客層を見込める、ひとつのビジネスチャンスであり、そうしたニーズを見込んで、広告すごろくが企画されたのではないでしょうか。

なお、こうした宣伝用のすごろくは、東京や大阪の業者が印刷した「出来合い」の絵柄のものを購入し、その後、地元の業者が商店名などを追加するのが一般的でした。そのため、広告主の業種と絵柄が一致しない場合もあります。そうした状況を避ける工夫として、業種を問わずに使える正月らしい絵柄（鶴、亀、万歳、羽根つき等）も用意されていました。　（瓜生由起）

「新年繁昌雙六」

館蔵資料紹介

土人形の型

［法　量］

笠を持って舞う女	縦14.0	横 7.5	厚 3.0	小学生（水兵?）	縦21.2	横14.0	厚 7.7
随身	縦11.2	横 9.4	厚 3.5	天神（2）	縦15.2	横13.5	厚 7.0
牛乗り童子	縦12.4	横11.7	厚 6.5	白拍子?	縦23.8	横 3.5	厚 6.5
金太郎	縦17.8	横17.0	厚 8.2	舞う女	縦24.0	横15.0	厚 6.0
天神（1）	縦15.8	横13.4	厚 5.8	天神（3）	縦16.5	横14.3	厚 5.9（cm）

今回紹介する資料は土人形の型、10点です。残念ながら、それぞれの名称は伝わっていないため、笠を持って舞う女、随身、牛乗り童子、金太郎、天神3点、小学生（水兵?）、舞う女、白拍子という仮称を付けています。これらは現在の南越前町東大道で昭和初期まで土人形製作に使われていたものです。

土人形というのは文字通り、土、即ち、粘土を材料として人形としたものです。形を作るにあたって、型に入れてつくるもの、型に入れず、手により捻（ひね）ることでのみ作るものがあり、その後、乾燥させただけのもの、茶碗などと同じように窯で焼いたものとがあります。縄文時代の土偶や、古墳時代の埴輪などもこの土人形の一種と考えると古い歴史を持つものとなります。

江戸時代には、その多くが節供の際に飾られていました。現在も全国各地で作られており、江戸時代から製作が続けられたもののほか、土産品として復活したものもあるようです。

福井県内にも、数か所ですが土人形を製作していたところがありました。嶺北地方での土人形製作の始まりは、三国（現 坂井市三国町）と大野（現 大野市）の2か所で、江戸時代末期に始まったものといわれています。どちらも既に廃絶しており、現在は製作されていません。

三国のものは、鋳物師をしていた新保久左エ門により製作が開始されました。久左エ門は京都の伏見に行き、技術を学んだといわれており、伏見の土人形の系譜をひくものといえます。久左エ門の子らも土人形を製作していました。次男である佐治平は武生町（現 越前市）に移り、製作を続けました。製作の技術は、佐治平の息子である久治郎を経て、東大道の平野秀太郎に伝わりました。

秀太郎の父は丈太郎といい、宮大工をしていました。ある時、丈太郎は節供に飾る木彫天神（木造天神坐像）を作ることになり、それ以降、木彫天神を作るようになりました。息子の秀太郎もそれを手伝い、作っていました。そうした中で、久治郎から土人形の指導を受け、土人形も作るようになったのです。しかし、需要がなくなり、秀太郎も昭和初期に土人形の製作をやめています。

三国、大野など、嶺北地方の土人形はどれも昭和初期を最後に途絶えており、こうした型はごくわずかしか伝えられておらず、本資料も貴重なものといえます。

（川波久志）

天神（1）

笠を持って舞う女

随身

牛乗り童子

金太郎

小学生（水兵？）

天神（2）

天神（1）裏面

白拍子？

舞う女

天神（3）

研究ノート

1点の石器から
～あわら市番堂野西山遺跡出土の有舌尖頭器～

1．はじめに

博物館の収蔵資料に、写真に示す1点の石器があります。

写真を見るとわかりますが、本資料の形態的な特徴は舌のような形に造り出された基部（写真では下方）にあります。このような形をした石器を考古学では「有舌尖頭器」と呼んでおり、旧石器時代末に使用された石器の一つに位置付けられています。

有舌尖頭器は、細長い形をしていることから突き刺すことを主な用途と推定されており、その大きさから槍先として使用されていたものと考えられています。

2．資料概要

本資料は、あわら市番堂野に所在する西山遺跡から昭和35年に地元の人によって採集されたものですが、残念ながら先端部と基部が破損しており完全な形ではありません。

残存している大きさは、長さ53.5㎜、最大幅15.0㎜、最大厚7.0㎜を測ります。

本資料を細かく観察すると、形を整えるために器面全体に5～10㎜の調整剥離を行い、その後、縁辺部に2㎜前後の微調整による鋸歯状の歯を作り出していることがわかります。

3．福井県内出土の有舌尖頭器と出土遺跡の立地

有舌尖頭器は、旧石器時代末の代表的な石器として国内各地で多く出土していますが、福井県内での出土数は極めて少なく、僅か5ヶ所で31点が確認されているにすぎません（表1）。下の表を基に、各遺跡がどのような立地の場所に存在するのかを確認してみましょう。

姥ヶ谷古墳は、九頭竜川河口を見下ろす標高80m前後を測る陣ヶ岡台地上に位置する古墳です（位置図参照）。出土場所は有舌尖頭器の時代とは大きく異なる古墳時代の古墳からの出土ですが、平野から一段上がった陣ヶ岡台地の上に旧石器時代末の人々が生活を営んでおり、その人達が使用した石器の一つが、後の時代（古墳時代）になり何かの拍子に古墳の周溝内に紛れ込んだものと考えられます。

本遺跡の北西約1,300m付近の同じ台地上には、旧石器時代後期の西下向遺跡が確認されています（位置図参照）。

西山遺跡は、隆起性の洪積台地であり標高85m前後を測る加越台地上に所在し（位置図参照）、北潟湖の西方に位置しています（位置図参照）。周辺には縄文時代以後の遺跡が多数確認されていることから、加越台地が原始～古代人の生活空間として相応しい環境であったことがわかります。

表１　福井県嶺北地方出土有舌尖頭器出土一覧

遺　跡　名	所　在　地	点数	備　　考
姥ヶ谷古墳	坂井市三国町滝谷	1	発掘調査により古墳の周溝から出土
西山遺跡	あわら市番堂野	1	畑地より採集
茱山崎遺跡	あわら市北金津	5	発掘調査中に包含層より出土
鳴鹿山鹿遺跡	永平寺町鳴鹿山鹿	23	明治元年前後に用水工事中に発見 局部磨製石斧１点、尖頭状石器１点、石核２点が共伴遺物として現存するが、他に有舌尖頭器２点、石核１点が現在行方不明となっている
王山25号墳	鯖江市日の出町	1	発掘調査により台状墓の頂部から出土

茱山崎遺跡は、西山遺跡と同じ加越台地上に所在しますが、西山遺跡が台地の内陸部に位置するのに対して、本遺跡は台地の南縁辺部に位置し、本遺跡の南側下方には竹田川の氾濫原が広がっています（位置図参照）。

鳴鹿山鹿遺跡は、福井・岐阜県境に源を発し、西流しながら日本海に灌ぐ九頭竜川中流域の発達した河岸段丘の右岸に位置します。また、本遺跡を起点として西方には福井平野が大きく開けており、九頭竜川が平野に流れ出ることによって形成され発達した扇状地の基部にも当たります。

王山25号墳は、弥生時代後期の方形台状墓で、標高60m前後を測る南北に細長く伸びる鯖江台地の南端に造られています。

出土した石器とは大きな時代差がありますが、鯖江台地上に旧石器時代末の人々が生活を営んでおり、彼らが残した遺物の一つが数千年後の弥生時代後半に25号墳が造られた際に混入したものと思われます。

以上、有舌尖頭器が出土した5ヶ所の地形的立地についてご紹介しましたが、これらの遺跡全てが平野より一段高くなった台地上に作られていることが理解できたのではないでしょうか。この事は、言い換えれば旧石器時代末の人々の生活領域は、現在の台地または丘陵地帯にあったと言えます。

そうした中で、今回ご紹介した西山遺跡や茱山崎遺跡が所在する加越台地は彼らの生活領域として貴重な存在です。

福井県の地形は、平野から直接山地へと移行する場所が多く、平野から一段高くなった台地や丘陵地帯は極めて少なく、加越台地のようにある程度のまとまった面積を有する台地は他にありません。

加越台地は、その縁辺部を除き余り開発の進んだ地域ではないので、現在までに僅か2ヶ所のみ（隣接する陣ヶ岡台地も入れると3ヶ所）で旧石器時代末の遺跡が確認されているにすぎませんが、今後、発掘調査の機会が増えれば出土数も増加するものと想定されます。

4．おわりに

今から60年近く前に畑で拾われた1点の石器をキーワードとして、旧石器時代末（約12,000年ほど前）の福井県の先人である狩人達がどのような環境の場を生活エリアとしていたのかをご紹介しました。

たった1点の小さな石器でも、考古学的には極めて重要な資料となり得ることを西山遺跡出土の有舌尖頭器は物語っています。　（水村伸行）

陣ヶ図・加越台地所在の旧石器時代遺跡位置図

博物館日誌（平成28年4月～8月）

4月

- 7日（木）
  生涯学習・文化財課来館（橘家文書調査）
- 14日（木）
  滋賀県立安土城考古博物館来館（資料貸出）
- 15日（金）
  福井県立こども歴史文化館来館（資料貸出）
- 22日（金）～5月22日（日）
  企画展「写真が語る思い出の福井駅前」（特別展示室）
- 27日（水）
  福井市立郷土歴史博物館来館（資料貸出）
- 29日（金・祝）
  企画展「写真が語る思い出の福井駅前」展示説明会（特別展示室）

5月

- 3日（火・祝）
  企画展「写真が語る思い出の福井駅前」展示説明会（特別展示室）
- 12日（木）
  福井県立こども歴史文化館来館（資料調査）
- 21日（土）
  ふくい歴博講座「写真で振り返る福井駅前の変遷」（研修室）
- 23日（月）～6月1日（水）
  燻蒸休館
- 24日（火）
  福井県立こども歴史文化館来館（資料貸出）

6月

- 2日（木）～6月30日（木）
  写真展「福井震災の記録」
- 4日（土）～21日（火）
  館蔵資料公開「姉川合戦図屏風」（特別展示室）
- 11日（土）～9月18日（日）
  特別公開「村を守る社とお堂」（オープン収蔵庫）
- 11日（土）
  福井県立こども歴史文化館来館（資料貸出）
- 12日（日）
  「姉川合戦図屏風」展示説明会（特別展示室）
- 19日（日）
  「武の時代をイメージした茶会」（エントランスロビー）
- 23日（木）
  福井市文化財課来館（資料調査）
- 24日（金）
  大音家文書調査委員会（研修室）
- 29日（水）～7月2日（土）
  資料燻蒸処理（燻蒸室）

7月

- 1日（金）～8月31日（金）
  写真展「ふくいの海水浴場」オープン
- 1日（金）
  勝山市教育委員会来館（資料調査）
- 7日（木）
  国体推進局来館（資料調査）
- 13日（水）
  福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館（資料貸出）
- 14日（木）
  凸版印刷株式会社印刷博物館来館（資料調査）
- 21日（木）
  特別展「ふくいの婚礼」開会式（エントランスロビー）
- 22日（金）～8月31日（水）
  特別展「ふくいの婚礼」オープン（特別展示室）
- 23日（土）
  ふくい歴博講座「ふくいの婚礼」（研修室）
- 24日（日）
  「万寿（饅頭）まき」（正面玄関前広場）
  特別展「ふくいの婚礼」展示説明会（特別展示室）
- 27日（水）
  福井県博物館協議会役員会・総会（研修室）
- 28日（木）
  鯖江市まなべの館来館（資料借用）
- 30日（土）
  婚活パーティin ナイトミュージアム（カフェ・特別展示室）
- 31日（日）
  「万寿（饅頭）まき」（正面玄関前広場）
  特別展「ふくいの婚礼」展示説明会（特別展示室）

8月

- 3日（水）～8日（月）
  博物館実習（館内）
- 5日（金）
  福井県立若狭歴史博物館来館（資料貸出）
- 7日（日）
  特別展「ふくいの婚礼」展示説明会（特別展示室）
  サポーターズイベント昭和の夏遊び「しょうのう船を作って遊ぼう！」（正面玄関前広場）
- 18日（木）
  消防査察（福井南消防署）
- 20日（土）
  キッズミュージアム「竹水鉄砲を作って遊ぼう！」（車庫前）
- 21日（日）
  「涼風を呼ぶ茶会」（エントランスロビー）
- 27日（土）～28日（日）
  大音家文書調査委員会（研修室）

［編集・発行］
福井県立歴史博物館
〒910-0016 福井市大宮2-19-15 TEL0776-22-4675㈹
http://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.54 平成28年9月23日発行